

【第3回】

ピアノ・アンサンブル  
って楽しいな  
～連弾の導入法とソロへの活用法～

PINA Piano Seminar



江崎 光世 先生

Mitsuyo Ezaki  
当協会評議員

●ピアノ連弾を楽しむために 私の連弾活用法

ピアノという楽器はじつに多彩な能力を持っています。幅広い豊かな表現が可能な楽器であるだけに、一人でこの機能をフルに発揮できるようになるまでには、何十年もかかってしまいます。また、ピアノには独奏楽器というイメージが強く、その練習は一人で長時間部屋に閉じこもることを強られるために、ともすると機械的で、無味乾燥な演奏に陥りやすく、いつの間にか協調性に乏しく融通のきかないという、音楽的にも人格的にも偏った人間になる危険性がなきにしもあらずです。ピアノ・アンサンブル…連弾は、音楽することの楽しさを身をもって味わわせるには一番の近道であり、効果のあるものです。小さいころから二人、三人などで一つの曲を弾くことは音楽的な基礎を身体で覚え、相手を通して音楽に対する感じ方を深め養うことにもなります。さらに、人間的にも、相手に対しての思いやりや協調性、責任感などを自然に学び、会得していくこともできます。

●なぜアンサンブルをするのか？

連弾というと、読譜的にはやさしく、一人でないという気安さも手伝い、えてして気分転換やお遊び的に感じがちですが、逆にそこを教師が上手に利用することによって、ソロの演奏にも大いに活用できるものです。私がピアノ・アンサンブルをピアノ・レッスンに取

り入れている主な目的は次のような事です。

- 1: 聴く耳を育てる  
連弾で合わせるためには、お互いに自分以外の音にまで耳をつかいながら自分の音を調和させていかねばなりません。音のバランス感覚をマスターさせるのに連弾はよい手段になります。
- 2: 呼吸法の会得  
連弾では、出だしをはじめ随所でお互いに合わせねばならないところが多くあり、フレーズ感、リズム感、同時打鍵など呼吸を合わせる事が大切なポイントになります。違う個性をもった二人、三人、四人の共同作業ですから、お互いの呼吸を敏感に感じとる訓練になります。
- 3: 自発的な音楽作りの基礎を養う  
ある程度の基礎ができたところで、音楽の作り方を子どもたちに話し合えます。お互いの音楽の感じ方の違い、技術のマスターの方法、練習方法などを相手と話し合うことによって、一人の時には得られないヒントを発見したりして、自分たちの力で音楽に仕上げていく楽しさや喜びを感じることは大きな魅力でもあります。ピアノに限らず、一つのことをマスターするためには、いつも楽しいことばかりではなく、かならず苦しい部分がつきまとうものです。1人では挫折しがちなこともお互いに励まし合ったり、慰め合うことで長続きできるでしょう。

●ピアノ・レッスンを始めて、どれくらいから連弾を導入すればよいか

導入教材の多くは単旋律。そのメロディにリズム、ハーモニー、対旋律を先生が弾くことにより、音楽としてのまとまり、流れを体験できるように導かれています。したがってピアノを始めると同時に連弾は導入されています。最近ではミュージック・データ、CD等でよりオーケストレーション化された内容で曲のイメージ、音の色彩感がリアルに感性豊かに幼児に体験出来る教材が多くなってきました。多いに活用したいものです。

●連弾のパートナー作りは？

- 1: 先生が選ぶ方法 (出会いの下準備の役目)
  - ・ 同年代でお互いに刺激しあえるパートナー
  - ・ 先輩・後輩でお互いの長所・短所を補いあえるパートナー
- 2: 自主的に選ばせる方法
  - ・ 気の合うパートナー
  - ・ 練習が容易にできるパートナー (時間、場所等)
  - ・ 音楽の感じ方が似ているパートナー
  - ・ 音質 (身体的条件一指、手、身体つき等) の似ているパートナー

●Duo曲の選曲ポイントは？

Duoをする目的意識を明確にもつこと。

- 1: 楽譜上からの選曲
  - ・ 曲をよく知ること (曲の特徴、長さ、音域等)

- ・ 曲の形態、調子、拍子、テンポ、難易度の把握
- 2: 弾き手 (生徒) 側からの選曲
  - ・ 身体的条件 (指、手、身体等の資質面)
  - ・ 感性的条件 (リズム感、テンポ感、フレーズ感、表現力等)
  - ・ 性格的条件 (集中力、持続力、積極性、反射力等)
- 3: 生徒の意欲と親の協力度
- 4: 練習時間の確保の可能性

●連弾をする時の大切なポイントは？

- 1: スコア式の楽譜にする
- 2: 各パートごと各小節に番号をつける
- 3: いすの並べかた
- 4: アインザッツ (出だしの呼吸) の方法
- 5: イニシアチブのとり方
- 6: 音の一致 (タッチ、フレーズ、呼吸)
- 7: バランス (ひびき)
- 8: 音楽の一致
- 9: ペダル

●どんな教材を使えばよいか

ソロのように系統だてられた教本が特別にあるわけではないのですが、先生と又お友達と一緒に弾くことが楽しい、各パートはやさしくて単純なのに二人、三人で弾くと音楽の幅が広がる曲がよいでしょう。連弾曲は(イ)横割りの曲(ロ)縦割りの曲(ハ)P.Sに同時に旋律が現れる曲(ニ)対位法の曲 (※注デュオコダマ方式)に分類されますが、導入時には横割りの曲から入り、縦割りへと進めていくと自然に連弾のテクニックが養われていくものです。

●連弾の練習方法は？

- 1: 各自のパートを責任もって練習する。
- 2: 相手のパートに目を通しておく。
- 3: 合わせた時に全体の流れを感じとり、自分のパートが全体の中でどの様な役割をもつかを確認する。
- 4: 肉声どうし、外声どうし、また伴奏部のみ、旋律のみの部分練習でバランスを決めていく(テーブルコーダーを使用)
- 5: ペダルを確認し、テープを用いて客観的に聴いて、ひびきを作っていく。

【連弾の導入教材の紹介】

- |                 |                          |
|-----------------|--------------------------|
| (1)ハインツ・シュンゲラー編 | 『新しい子どもの歌の本1.2』日本ショット・全音 |
| (2)パスティン        | 『デュエットファボリッツvol.1-4』東音   |
| (3)グローバー        | 『ピアノれんだんvol.1-4』音友       |
| (4)ラーニング・トゥ・プレイ | 『ふたりでたのしくvol.1.1-2』全音    |
| (5)たなかすみこ編      | 『二つのメロディーあわせ』音友          |
| (6)ジョン・ジョージ     | 『ピアノ・カレイドスコープ1.2』全音      |
| (7)             | 『譜めくりのいらぬやさしいピアノ連弾』ヤマハ   |
| (8)テュルク         | 『子供のピアノ連弾』音友             |
| (9)成田剛          | 『お母さんといっしょに連弾曲集第1課程』音友   |

- 6: 音楽のイメージについてお互いに相談し、表情や構成を考える。
- 7: お互いの長所、短所を認め合い、合わせやすく工夫する (自己発見)。

●連弾の効用は？

- 1: 連弾はアンサンブル (合奏) です。したがって、お互いによく音を聴きあうようになる。また、経験を積む事によって聴き分けられるようになる。
- 2: 出だしや要所を合わせるために、呼吸に関心ができる。
- 3: 音のバランスについて特に注意するようになる。
- 4: フレーズ、ダイナミック、アーティクレーションについても大切にする。
- 5: ペダルに関して敏感になる。
- 6: 対位法的な曲の勉強も容易になる。
- 7: 協調のための責任感と義務感が生まれる (勉強方法や練習習慣も良い方向に向く)。
- 8: 孤独なピアノ練習も、苦しみ半分に、喜びは2倍になる。
- 9: コミュニケーションを通して相手から吸収したり、互いに刺激し合い、視野が広がり、考え方も多角的になり、人間的成長が望める。

●コンチェルトの導入法—オーケストラと合わせるためのポイント

- (1)オーケストラの序奏の間にテンポを身体で感じる (テンポ設定)
  - ・ 前奏は待つのではなく、曲のテンポ、イメージを感じ取るもの。
  - ・ カウントサインの場合は、曲頭直前の空白で呼吸をする。
  - ・ オーケストラと同じ呼吸を感じ、その流れにのる。
- (2)オーケストラの楽器の音色から曲のイメージをふくらませる。
  - ・ 各々の楽器の音色、Tutti、木管楽器の重奏、弦楽合奏、金管楽器のひびき、打楽器の音 (聞き分ける耳の力と音色をつくるタッチ…指のコントロール)
- (3)音楽の言葉 (フレーズ) を感じとる
  - ・ 1拍ごと、1小節ごとの音並べではなく、4小節フレーズ感、1小節2つの波の感じ方等をオーケストラの演奏から感じとっていく。

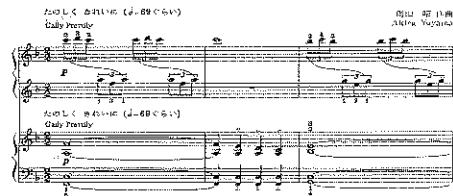
- (4)オーケストラとの対話を楽しむ  
 ・オーケストラからメッセージをもらったり、送ったりするかけ合いの楽しさ。  
 ・オブリガードにのりハモリながらメロディーの抑揚を感じ取る。
- (5)室内楽的アンサンブルを楽しむ (バロック音楽)  
 ・弦楽器と鍵盤楽器では奏法の違いから拍のきざみ、テンポ感の感じ方が微妙に違うことを感じ取らせ、合わせ方の工夫をする(呼吸、タッチ)。  
 ・オーケストラの一員として各々の独奏楽器をひきたたせる演奏を通してバロックスタイルの室内楽を学ぶ(調和のとれたアンサンブル)。

●コンチェルトの効用

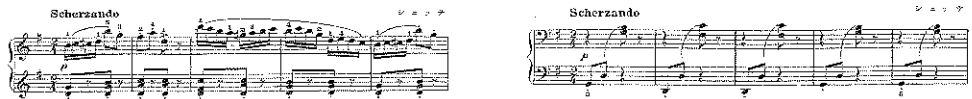
- 1:音楽、アンサンブルの楽しさを体感する。  
 ・CDと合わせても音楽の広がりを感じられる。  
 ・オーケストラと合わせる事により音楽の立体感を感じる。  
 ・練習への意欲となる。
- 2:感性を育てる・躍動するリズム感→オーケストラ

- の流れにのる。  
 ・音楽の言葉(フレーズ感)→オーケストラとの対話から。  
 ・美しいひびき(ハーモニー感)→オーケストラの楽器の音色から。バランス、タッチに導入。
- 3:表現力の巾を広げる。  
 ・自然な流れ(テンポ感、フレーズ感にのる)。  
 ・ダイナミック、音の方向性。  
 ・持続音、レガートの表現力に應用。
- 4:テクニック(特にメカニック)の強化につなげやすい。  
 ・合わせるためにタッチの矯正がしやすい。  
 ・音量のバランスに耳を使うようになる。
- 5:構成力を養い、スケールの大きな演奏への導入。  
 ・オーケストラとの対話を通して音によるストーリー性を感じるようになる。
- 6:説得力のある、魅力ある演奏につなげていく。  
 ・アンサンブルはコミュニケーション。自分の主張をはっきりさせ、相手の主張にも耳を傾けるようになる。(自分の呼吸の使い方)

楽譜の書式 [1] スコア式



[2] 左右式



連弾曲の分類 [1] 横割りの曲



[2] 縦割りの曲



[3] Primo Secondolに同時に旋律が現れる曲



[2] 対位法曲

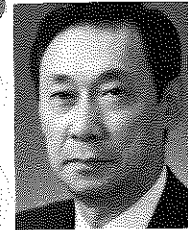


【第4回】

もっと気軽にソルフェージュを指導しよう

～出来る生徒・出来ない生徒の指導～

PINA Piano Seminar



成田 剛先生

Tsuyoshi Narita

作曲家、名古屋音大教授、当協会正会員

私は中高年の講座「50歳からのピアノ」を初めてから、やがて6年目に入ります。楽譜は見るだけで頭が痛い生徒…。左右が別々に動く指にもものすごく時間のかかる生徒…。暗譜が大嫌いな生徒…。一定のリズムを刻むことの出来ない生徒…。そして、嫌になったらすぐに止めてしまう生徒…。一方、私の3人の孫に、遊び相手にとピアノの指導を始めました。上の娘は小学2年生、下の双子の娘は年中さんです。これらの生徒たちを教えて、私が今まで経験することのなかった実に多くのことを学ばせてもらっています。そして、指導するほどにピアノの指導にはソルフェージュが不可欠のものであることを痛感しています。英才教育や受験指導のソルフェージュとは別の、気軽な遊びムードで、しかも効率よく指導する方法を、私の孫たちの指導から得たことを中心に話を進めましょう。話は、私がいま作っている『よい子のピアノ日記』シリーズの考え方に沿って進めることになります。このシリーズは、幼児から小学低学年生のためのもので、第一に読譜力を系統的に育てること、第二に生徒が「楽しい曲が弾けた」という喜びを感じることを出来る教材であること、の2本の柱からなっています。本日使用のテキストは、このシリーズの「よい子のソルフェージュ」(1)(成田音楽教育研究所版)を使用している話となります。年長さんの、レッスンを始めて2カ月目あたりの生徒を想定しています。

(1) 視唱課題の確認(譜例1)

初期の生徒の指導では、原則として先生が生徒といっしょに歌い、出来そうなきだけ一人で歌わせてみます。そのとき、音程はどうの、リズムはどうのと言いだすと子どもは萎縮してしまい、視唱が嫌いになってしまいます。幼児や小学1～2年生ではまだ声のコントロールのままならない場合が多いので、音程のことはとやかく言わずに、まずは読譜のトレーニングと割り切って指導することが大切です。生徒には、「毎日2回ずつ歌いましょう」と指導しますが、半年、1年と経つうちに、次第にしっかりした音程で歌えるようになってきます。

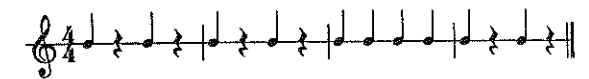
譜例 1



(2) リズム課題の確認(譜例2)

このリズム練習はみんな大好きですが、速いテンポで…となると気持ちばかり先走り、なかなかうまくいきません。初期のうちはリズム感の育成は別の方法でやることにして、やはり読譜指導の一環と割り切って指導します。

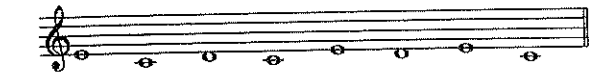
譜例 2



(3) 読む練習(譜例3)

音符を指さしながら「ド・ミ・レ…」と読みますが、初期の「ド～ミ」の3個の音のうちにしっかりと力を付けてしまうと、後は読むことの好きな生徒になります。その力が視唱や演奏を楽なものとし、生徒がのびのびと練習に取り組む基礎を作ることになります。速く読もうとすると気持ちばかりあせて、かえって遅くなってしまいますので、一定のテンポで「確実に読む」ことを意図して、いろいろ工夫しながら根気よく指導します。

譜例 3



以下はテキストを離れての指導となります。

(4) 模唱一聴唱

子どもの音感を育てる初期の方法として最も効率の良いのが、この「模唱一聴唱」です。「ドレミ(ハイ)」 「ドレミ」と、先生の歌ったメロディーを真似歌いする「模唱」から始まって、徐々に先生がピアノを弾くだけの「聴唱」に切り換えていきます。ほどよいテンポでポンポンと受け答えを繰り返しますが、30秒も練